

手話による教育、聴覚障害者と聴者の共存をめざす

第30回記念

ろう・難聴教育研究大会のご案内

2007年7月28日（土）～7月29日（日）

大会テーマ：手話を基盤とするろう・難聴教育

主催 ろう・難聴教育研究会（旧TC研）

30年前の日本の聴覚障害教育は、口話一辺倒・手話全否定の時代でした。第30回記念大会となる今日は、ろう者・難聴者のコミュニケーション手段・言語としての手話が肯定的に理解され、聾学校の存在意義が改めて認識される時代になりました。

他方では、聾学校教育へのまともな反省・検討が全くないまま、「場の教育から個の教育へ」「聾学校から特別支援学校へ」の転換——聾学校名称の変更、養護学校との一体化、ろう学校の統廃合など——が、国の行政の都合で進められています。また、小中学校などでの、従来のインテグレーションにかわるインクルージョンとしての統合教育の道も模索され始めています。ここでも、手話とそれにまつわる理念が、時代を切り開くカギとして、浮上してきています。

新生児聴覚スクリーニングの普及による「早期発見」や、人工内耳の早期装用が広がる中で、早期支援の理念と態勢の確立が、ろう・難聴教育の原点として、また聾学校の存立の基盤として、大きな課題となっています。

手話に対する偏見・排除がなくなり、子ども達のコミュニケーションの制約が少なくなると共に、当事者・保護者の要求は、聴覚障害教育の実質——日本語の習得・習熟、学力の向上に——向かっています。

日本の聴覚障害教育の大きな流れを確認し、現場の悩みを共有し、明日の授業にすぐ役立つ考え方、指導のノウハウも提供できるような大会になればと願っています。

ろう・難聴教育研究会（旧TC研究会）会長 伊藤政雄

1 名称	第30回記念ろう・難聴教育研究大会
2 テーマ	「手話を基盤とするろう・難聴教育」
3 主催	ろう・難聴教育研究会（旧トータルコミュニケーション研究会）
4 期日	2007年7月28日（土） 9時20分受付開始～ 7月29日（日） ～17時00分終了
5 会場	日本大学文理学部百周年記念館・国際会議場・第2会議室 〒156-8550 世田谷区桜上水3-25-40 TEL 03-3329-1151

第30回 ろう・難聴教育研究大会実施要項

- 1 名称 第30回記念ろう・難聴教育研究大会
 2 テーマ 「手話を基盤とするろう・難聴教育」
 3 主催 ろう・難聴教育研究会 (旧トータルコミュニケーション研究会)
 4 期日 2007年7月28日(土) 9時20分～受付
 10時00分開始～17時00分終了
 17時00分～ろう・難聴教育研究会総会
 18時00分～20時30分(交流会)
 7月29日(日) 9時00分～受付
 9時30分開始～17時00分終了
 5 会場 日本大学文理学部百周年記念館・国際会議場・第2会議室
 〒156-8550 世田谷区桜上水3-25-40 TEL 03-3329-1151
 6 交通 12の会場案内をご覧ください。
 7 参加費

		2日間参加	1日のみ参加	交流会参加	昼食代
会員	一般	4000円	3000円	2500円	1000円
	学生	3000円	2000円	2500円	1000円
非会員	一般	6000円	4000円	2500円	1000円
	学生	4500円	3000円	2500円	1000円

8 申込方法

- (1) 7月20日までに①参加費等を下記(2)の郵便振替口座に送金した上で、②所定の「参加申込書」(??ページ)に記入し、下記(3)(4)宛に、メールまたはFAXして下さい。
 [かならず①②の二つをしてください]

削除：52

* 所定の「参加申込書」は、コピーしてお使いください。また、当研究会ホームページ www.deaf.or.jp/tc から取得できます。下記宛FAXで請求することもできます。

FAX 03-3884-9582 前田芳弘

* 送金と参加申込書を確認し、領収書兼参加票(はがき)をお送りします。

参加当日、受付に参加票を提示して下さい。

* 郵便振替での参加費等の振り込みは7月20日までとします。それ以降は、当日、受付にてお支払いください(参加申込書は、送ってください)。

※ 当日も参加を受付ますが、受付の混乱を避けるため、できるだけ事前に参加申込の手続きをしてください。

- (2) 参加費の送金先 口座番号 00110-2-314972
 加入者名：ろう・難聴教育研究会(旧TC研)

(3) メールでの申し込み先 mamame2@mtc.biglobe.ne.jp 森崎 恵子

(4) FAXでの申し込み先 03-3579-8355 森崎 恵子

(5) ろう・難聴教育研究会会員への加入のお誘い

年4回の会報、年1冊の研究冊子、大会・小研究会の割引参加などの特典があります。大会当日、受付で新規会員入会の手続きができます。会員になった方には、その場で大会参加費の減額分を返金します。

削除：3～

- 9 問合せ先 TEL 048-294-0369または090-6035-4686 矢沢国光
 FAX 03-3884-9582 メール tcymaeda@hotmail.com 前田芳弘

10 情報保障 手話通訳、パソコン字幕表示があります。

大会2日目の7月29日(日)は参議院選挙日になっています。

期日前投票をしましょう。

11 プログラム 情報保障（手話通訳、パソコン字幕表示）があります。

7月28日（土）		国際会議場で行います。	
9:20	受付		
10:00	主催者挨拶		伊藤政雄会長
10:10	成人聴覚障害者の言語生活から学ぶ （様々な思いを持っている当事者との対話を通して、現場の教育にフィードバック出来ることを探求する企画です。） 「手話と日本語－学校生活を振り返って」 菊池真里（筑波技術短期大学卒業、（株）キャノンソフトウェア：システムエンジニア） 「手話と日本語－学校生活を振り返って」 神宮寺真由美（筑波技術短期大学卒業、（株）リコー勤務）		
12:00	昼食（昼食場所は第2会議室、第3会議室、第4会議室、1階ラウンジです。）		
13:00	「幼児教育と遊び——実践を踏まえて」 青木久子（青木幼児教育研究所長） （聴覚障害である前に幼児としての当たり前前の育ちを大切に聴覚障害児の教育を幼児教育の実践から学びます。）		
15:00	「重複障害児の指導に望まれていること」 永石晃（大塚ろう学校杉並分教室教諭） （子どものニーズ、保護者の願いに応える重複障害教育の姿について考えます。）		
16:50	終了		
17:00	終了後、ろう・難聴教育研究会総会を行います。		
18:00	交流会		
7月29日（日）		午前は国際会議場と第2会議室に別れ、午後は国際会議場で行います。	
9:00	受付		
9:30	分科会A ろう学校教師のための基礎講座です。	分科会B ろう・難聴教育の課題の協議に重点を置きます。	
	① 「国語科指導を進めるに当たって」 久米武郎（元横須賀市立ろう学校教頭） ② 「聞こえる先生方へのアドバイス——授業場面で児童生徒とのやりとりをうまくやりたいと考えている先生方へ」 早瀬憲太郎（大塚ろう学校講師）	「人工内耳と手話をめぐっての協議」 ① 「軽度聴覚障害者の言語・コミュニケーション生活とアイデンティティ」 梶山妙子（京都文教大学大学院生） ② 「人工内耳装用児のコミュニケーション」 斎藤宏（帝京大学医学部附属病院耳鼻咽喉科言語室） ③協議	
12:30	昼食（昼食場所は第2会議室、第3会議室、第4会議室、1階ラウンジです。）		
13:30	「ろう・難聴教育の原点としての早期母子支援」 南村洋子（横浜国立大学講師、大塚ろう学校講師） （原点としての早期支援の理念と態勢の確立をめざす実践に学びます。）		
15:00	「ろう幼児の手話言語の発達——その過程と日本手話の特徴——」 武居渡（金沢大学教育学部助教授） （対談形式で行います。日本手話についての理解を深める内容になります。質疑は20分程度。）		
16:50	挨拶		
17:00	終了		

12 プログラムの概要紹介

7月28日(土)

1 成人聴覚障害者の言語生活から学ぶ

(様々な思いを持っている当事者との対話を通して、現場の教育にフィードバック出来ることを探求する企画です。)

①「手話と日本語—学校生活を振り返って」

菊池真里(筑波技術短期大学卒業、(株)キャノンソフトウェア:システムエンジニア)
遅れがちな授業に対する不満を持ち、独学に出したろう学校時代、分からない授業やコミュニケーションを楽しめない高校生活の体験、自分の障害について見つめなおす機会になった技短時代、授業や交友関係での情報保障に悩んだ4年制大学時代、帰国すると私は「障害者」に戻ってしまった—今までで一番楽しい学生生活だったという満足感が得られたギャロデット大学への留学、「障害者自立」のための困難な課題について考える現在。

②「手話と日本語—学校生活を振り返って」

神宮寺真由美(筑波技術短期大学卒業、(株)リコー勤務)
キョード・スピーチでコミュニケーションに困らなかった奈良ろう幼稚園時代。夏休みだけの小学校通学体験や手話サークル、スイミング、塾に通い始めた小学部時代。手話が分かるようになってもキョード・スピーチを使い続けていた中・高等部時代。本格的に手話を使うようになって手話の地域差や日本手話と対応手話の違いや手話のできる先生できない先生がいることなどへの戸惑いを体験した技短時代。読話の限界を痛感し、手話・筆談・メール中心のコミュニケーションを楽しめるようになった現在。

2人の講師の現在までの体験を振り返りながらコミュニケーションのあり方やろう教育のあり方など未来について共に考える企画です。

2 「幼児教育と遊び—実践を踏まえて」

青木久子(青木幼児教育研究所長)

(聴覚障害である前に幼児としての当たり前前の育ちを大切にすると聴覚障害児の教育を幼児教育の実践から学びます。)

略歴

青山学院大学大学院修士課程修了
幼稚園教諭より、東京都教育庁指導部 都立教育研究所統括指導主事、
国立音楽大学教授 兼 同附属幼稚園園長職等を歴任。
現在、青木幼児教育研究所主宰。

主な著書

「教育学への視座」(共著、萌文書林、1999)
「生きる力を育てる保育」全3巻(共著、世界文化社、1999)
「子ども理解とカウンセリングマインド」(共著、萌文書林、2001)
「子どもに生きる」(萌文書林、2002)
「環境をいかした保育」全4巻(編著、チャイルド本社、2006)他多数
現在「幼児教育 知の探求」全20巻(萌文書林 2007 一部既刊)を執筆、編集中

3 「重複障害児の指導に望まれていること—ご家族への面接調査より—」

永石晃(大塚ろう学校杉並分教室教諭)

(子どものニーズ、保護者の願いに応える重複障害教育の姿について考えます。)

重複聴覚障害の子どもたちのすがたは多様であり、そして家族の思いや願いもさまざまである。それゆえに重複聴覚障害教育は子どもたちとの出会いとともに0からのスタートであるような気がする。教師として子どもや家族と関わる時間は、子どもと暮らし育てていく家族の営みから見ればごく僅かな時間ではない。こうした中で私たち教師は子どもと家族のどのような希求に思いを馳せ、そして支援を考えてゆけばよいのだろうか。子どもと家族が歩んできた軌跡に素直に耳を傾け、長い人生というスパンからあらためて教育実践をふりかえてみると、今まで気づくことができなかつた大切な視点に気づかされることもある。当事者の視点から支援をとらえ直すという試みを通じて、家族はどのようなことを考え子どもたちを育ててきたのか、そして重複聴覚障害教育に求められているものは何かという問題について考えてみたい。

7月29日(日)

1 分科会A (ろう学校教師のための基礎講座です。)

①「国語科指導を進めるに当たって」

久米武郎(元横須賀市立ろう学校教頭)

講師紹介 1940年 佐賀市生まれ。元横浜市立ろう学校教員。日本作文の会・ろう教育科学会会員。著書『心を育て、ことばを育てる』(ぶどう社 1994年)、『ことばを育て、自立を育てる』(ぶどう社 1995年)

講演予告

- 1 成人聾者に見る「読む」力・「書く」力の実態
- 2 作文に見る聴覚障害児の特徴～ 記述・言葉、認識・表現、そして思考

- 3 基礎学力を高めるための教師の心得八か条
- 4 「言葉による思考」をどう教えるか
- 5 国語科指導の究極の目標

② 「聞こえる先生方へのアドバイス—授業場面で児童生徒とのやりとりをうまくやりたいと考えている先生方へ」

早瀬憲太郎（大塚ろう学校講師）

講師紹介 奈良県出身。東京都五反田でろう児対象の学習塾「早瀬道場」を運営。大塚ろう学校で教育相談指導員の傍ら非営利団体スマイルフリースクール理事長をつとめる。また関東周辺のろう学校で教員・保護者対象の研修会や、教員対象の手話による授業の進め方講習会の講師もつとめる。

講演予告

学校で授業や休み時間での会話、親子との対話など様々な場面でろう児へどのように分かりやすく確実に伝えていくかをワークショップ形式で実演しながら進めていきます。

2 分科会B（ろう・難聴教育の課題の協議に重点を置きます。）

① 「軽度聴覚障害者の言語・コミュニケーション生活とアイデンティティ」

梶山妙子（京都文教大学大学院生）

② 「人工内耳装用児のコミュニケーション」

斎藤宏（帝京大学医学部附属病院耳鼻咽喉科言語室）

③ 協議（「人工内耳と手話をめぐっての協議」）

バイリンガルを進めてきた北欧では人工内耳装用児が増えてバイリンガルろう教育の内容に大きな変化が生じているようです。聴覚依存のコミュニケーションというだけでなく手話・文字依存のコミュニケーションでもない、どういうところに落ち着くのか予断を許さないのですが、人工内耳も手話もという何か新しい動きが始まっているようです。

日本でも今後人工内耳装用児の増加が予想されます。日本ではどうなっていくのでしょうか。手話の使用が広がっているとはいえ、ろう者の言語である日本手話がろう教育で必ずしも広がっているわけではありません。不全感を持たずにすむ日本手話と個々の習得能力（聴覚活用や人工内耳の装用なども含めて）に応じた日本語、この2言語コミュニケーションの効果的な獲得、使用が今後の重要な課題だと思いますが、このような課題について考えていくために、難聴者（梶山さんの報告）のコミュニケーションの実態や日本の人工内耳装用の実情（斎藤先生の報告）について理解を深め、議論したいというのが分科会の趣旨です。

3 「ろう・難聴教育の原点としての早期母子支援」

南村洋子（横浜国立大学講師、大塚ろう学校講師）

（原点としての早期支援の理念と態勢の確立をめざす実践に学びます。）

新生児聴覚スクリーニング検査が一般化し、生後すぐにろうあるいは難聴と診断されて支援を求める母子が増えてきている。まさにろう・難聴教育は、赤ちゃんが産声を上げたときから始めなければならない時代になっている。早期支援に携わる者には、耳が聴こえない・聴こえにくいことに対する正しく深い理解に基づいた母子への支援が求められている。殊に早期支援の多くは、子どもの母親を対象としたものであることを考えるとき、支援者から母親へそして子どもへと受け継がれていく内容は、どのようなものが最も適切であるのか。母親の心の軌跡と子どものコミュニケーションの発達など、事例を紹介しながら考えてみたい。

4 「ろう幼児の手話言語の発達——その過程と日本手話の特徴——」

武居渡（金沢大学教育学部助教授）

（対談形式で行います。日本手話についての理解を深める内容になります。質疑は20分程度。）

武居先生は日本手話と日本語を自然習得したコーダ（CODA, children of Deaf adults）です。筑波大学を卒業し、現在は金沢大学教育学部准教授として教員養成に携わりながら、1）ろう児の手話獲得過程に関する研究 2）ろう児の手話力の客観的評価に関する研究 3）ろう児の手話とリテラシーの指導法について 4）手話を使った授業実践の支援と情報提供 以上のような研究や講演活動を精力的に行っている新進気鋭の研究者です。

コーダで手話通訳者として活躍される方は比較的多いのですが教員養成や手話研究に携わっている武居先生は大変稀有な存在です。手話をも肯定的・積極的に取り入れ、日本語と手話のバイリンガル状況の中で、日本の聴覚障害教育は進められるようになり、今後もこの傾向は続くでしょう。大会を締めくくるとこのプログラムは、武居先生がろうのご両親のもとでどのように育ったのか、手話と日本語の2言語をどのように獲得なさったのか、なぜ手話の研究を始めるようになったのか、どのようなお気持ちで教員養成をなさっているのか、研究の内容や成果などもうかがいます。「対談」ですから「講演」には出てこない話にもふれ、分かりやすく楽しい内容になることを願っています。

同会進行役は幼児教育を中心に3年間ろう教育の現場に立っている前田芳弘（大塚ろう学校江東分教室）が担当します。指導現場で悩んできた数多くの課題が解決に向かうように、武居先生と建設的なやり取りができればいいと期待しています。

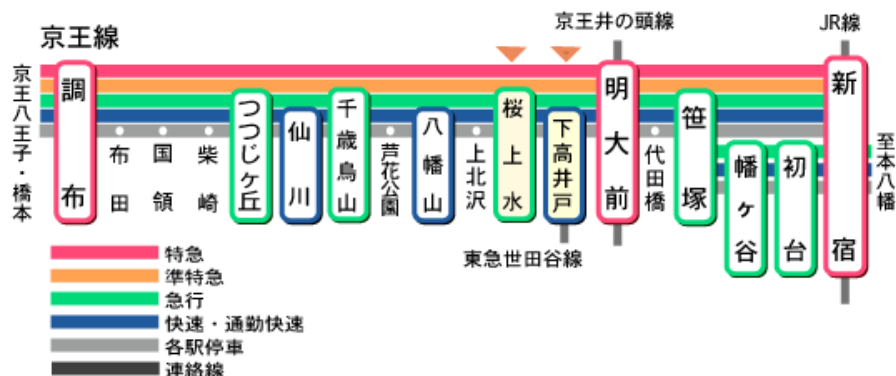
13 会場案内（日大文理学部HPからコピー
しました。）

交通 京王線 下高井戸駅あるいは
桜上水駅下車、徒歩8分

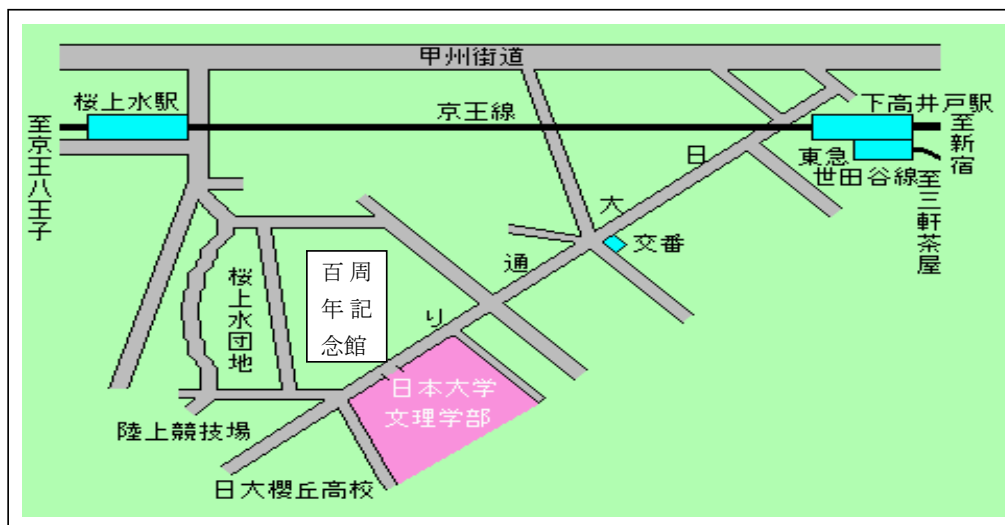
- 京王線新宿ー下高井戸間
・乗車時間:10分 ・料金:150円
- 京王線新宿ー桜上水間
・乗車時間:12分 ・料金:150円
- 小田急線豪徳寺ー世田谷線山下ー下高井戸間
・乗車時間:5分 ・料金:130円



(写真: 日本大学文理学部百周年記念館)



- ・ 会場の百周年記念館は日本大学文理学部の真向かいにあります。
- ・ 下高井戸駅から会場までは一本道で分かりやすいです。ただ下高井戸駅は急行が止まらないので各駅停車か快速に乗るよう注意が必要です。



当研究会ホームページをご覧ください。

www.deaf.or.jp/tc

2007年7月28日～7月29日

第30回記念ろう・難聴教育研究大会 参加申込書

※は必ず記入して下さい。(その他は任意)。FAXかTELのいずれか記入して下さい。

*ふりがな		性別	会員区分		コミュニケーションスタイル
*氏名		男女	*会員 非会員	*会員番号	・ろう・難聴・聴
*住所	〒				
*FAX		*TEL			
*E-Mail	(メールマガジンをお送りします。未登録の方は記入して下さい。)				
所属団体	*ご自身の立場を○で囲んで下さい。 1. 学校関係者 2. 親 3. 手話関係者 4. 学生 5. その他				

(★会員番号は会報帯封の名前の下に印刷してある5桁の番号です)

項目		金額	*○印
会 員	一 般	2日間参加	4000円 分科会A、分科会B
		1日間参加	3000円 28日、29日 分科会A、分科会B
	学 生	2日間参加	3000円 分科会A、分科会B
		1日間参加	2000円 28日、29日 分科会A、分科会B
非 会 員	一 般	2日間参加	6000円 分科会A、分科会B
		1日間参加	4000円 28日、29日 分科会A、分科会B
	学 生	2日間参加	4500円 分科会A、分科会B
		1日間参加	3000円 28日、29日 分科会A、分科会B
交流会参加費		2500円	
昼 食 代	7月28日	1000円	
	7月29日	1000円	
合 計		*	

振込み額 円

振込み日 2007年 月 日